

はじめに ～2019年はフェアトレードの年？

2019年は、日本のフェアトレードにとって飛躍の年になる。

自治体ぐるみでフェアトレードの推進に取り組むフェアトレードタウンは日本で5番目となる札幌市が今春にも認定される。さらにその次には三重県いなべ市が続き、岐阜県垂井町、島根県松江市、出雲市等でも独自の取り組みが繰り広げられており、萌芽段階にある地域はさらに全国各地に広がる。

フェアトレードといえば、「モノの取引を通じて、主に発展途上国の厳しい条件に置かれた生産者と先進国の消費者を、顔の見える関係で結び、公正な関係を創り出すことによって、生産者の経済的自立を図る取り組み」として知られ、その代表的なモノ＝商品としては、バナナ、カカオ、コーヒー、紅茶などがよく知られている。つまり、フェアトレードとは、これ等の商品の生産、取引に適正な価格設定や長期安定的取引など、いくつかの原則を適用することにより、世界の貧困・格差・搾取の解消という目的に貢献するものという理解が一般的である。

しかしながら、フェアトレードの原則・基準を子細に検討し、実際に行われている活動を見ると、フェアトレードは、野生生物の保全にも関わっていることが分かる⁽¹⁾。

本小論では、フェアトレードの視点から、その基準の中に含まれる野生生物の保全に関わる項目を検討し、具体的なフェアトレードプロジェクトを取り上げてフェアトレードの野生生物保全への貢献を「代替型」と「寄付型」として紹介する。さらに、フェアトレードによって地域社会における人と野生生物の対立を克服したアフリカ、ケニアの具体的な事例を紹介してその意義を論じ、野生動物保護に関わる認証制度を紹介する。

1. フェアトレード基準に見る野生生物保全

世界のフェアトレード2大ネットワークFairtrade International (FI) と World Fair Trade Organization (WFTO) の基準と野生生物保全とのかかわりを順にみてみよう。まず、大手スーパーマーケットチェーンや、生協で身近なFIのラベル商品の場合には、詳細な基準は、商品ごとに多岐にわたるが、表1の共通の基準の環境的基準の中に土壌・水源・生物多様性の保全が明記されている。

経済的基準
●フェアトレード最低価格の保証 ●フェアトレード・プレミアムの支払い ●長期的な取引の促進 ●必要に応じた門前払いの保証など
社会的基準
●安全な労働環境 ●民主的な運営 ●差別の禁止 ●児童労働・強制労働の禁止など
環境的基準
●農薬・薬品の使用削減と適正使用 ●有機栽培の奨励 ●土壌・水源・生物多様性の保全 ●遺伝子組み換え品の禁止など

表1 ラベル商品に適用される国際フェアトレード基準
(https://www.fairtrade-jp.org/about_fairtrade/intl_standard.php)

また、フェアトレード団体と生産者団体の世界的な連合であるWFTOの基準の場合には、10基準の10番目に環境があり、

生産者団体は、持続可能な供給源からの原材料を最大限利用し、可能な限り地元から調達し、エネルギー消費の少ない生産技術を用い、温室効果ガスの発生を最小限に抑えた再生可能なエネルギー技術を用いる。廃棄物が環境に与える影響を最

小化するよう努め、可能な限りオーガニックないし低農薬の生産方法をもちいることで、環境への影響を最小化すること、そして輸入側も、持続可能な供給源からの原材料を使って生産された環境への影響が総体として最も少ない製品を優先的に購入する。全フェアトレード団体は、可能な限り再利用可能な意思生物分解性の高い材料を使って包装し、可能な限り海上輸送を使って発送する（下線筆者）。

と、環境への影響を抑え、持続可能な原料調達、加工、輸送が定められている。

これらの基準から、フェアトレードは、人に優しいだけでなく、環境にも優しいことが分かる。

以上の基準においては、野生生物保全との関係が明確に謳われているわけではない。しかし、具体的なフェアトレード製品とフェアトレード団体の活動には、野生生物保全とさまざまな形で結びついているものがある。これらのいくつかの例を、非ラベル製品（FI認証ラベル以外）、ラベル製品（FI認証ラベル）の順に見ていこう。

2. 代替型と寄付型

非ラベル製品の例から見ていくと、タグア、象牙ヤシとも呼ばれる木の实を加工することによって象牙による製品に代替する製品を作り出しているケースがある。

フェアトレード団体のスローウォーターカフェは、エクアドルの森林にすむ先住民と連帯して、彼らのライフスタイルを生かした原材料を使ったフェアトレード製品を開発し、生物多様性が生かされた持続可能な地域づくりに貢献している。その製品のひとつがタグア⁽²⁾を使ったアクセサリーである。このタグアの実でアクセサリーを作り出し、象牙の代用品によって、象の密猟を減らし、種の保全に間接的に貢献している。

これは、野生生物から作られる製品に「代替」する製品を作り出すことによって、野生生物の保全に間接的に貢献するアプローチである。⁽³⁾

また、製品の売り上げの一部を保全基金に寄付することを明確にして、野生生物の保全に貢献する場合がある。シャプラニール＝市民による海外協力の会は、そのフェアトレード部門の「クラフトリンク」が2007年にトラカムバックと称する、阪神タイガースの公認グッズを作り、その収益の一部をJWCSの「トラ保護基金」に寄付した。このバッグには、阪神



図1 クラフトリンクのトラカムバック

タイガースが再び日本一となることへの願いが込められている。このバッグを製作したのは、ネパールのWSDO (Women's Skill Development Center) という団体でこれによってネパールのアウトカーストと呼ばれる女性たちの生業づくりにも貢献した。

このトラカムバックの例は、フェアトレード製品による売り上げの一部を野生生物保全団体に寄付することにより、野生生物保全に貢献するケースである。タグアの「代替」アプローチとは異なる「寄付」アプローチと言えよう。

ラベル製品においても、トラカムバックの例と同様に、売り上げの一部を活動団体に寄付することにより、野生生物保全に貢献するケースがある。

ラベル製品は、すでに私たちに身近なフェアトレード製品となっている。今は、大型スーパーチェーン店でも手に入るようになったベン&ジェリーズのアイスクリームは、できる限りのフェアトレードの原料で作られておりFIの認証を受けている。そして、その売り上げの一部は、ジェーン・グドール・インスティテュート⁽⁴⁾の青少年を対象とした草の根参加型環境教育プログラム、Roots and Shootsに寄付されていた。

3. 地域社会での人と動物の対立を解消したフェアトレード～ WILDLIFE WORKS

以上、非ラベル製品、ラベル製品の両者において、「代替」あるいは「寄付」といったアプローチで野生生物保全に貢献するケースを見てきた。さらに、野生生物と人間社会の直接の接触があり、人と動物の対立が問題となっている現地地域社会において、フェアトレードが野生生物保全に貢献している事例がケニアにある。それがWILDLIFE WORKSと呼ばれるプロジェクトである。

このプロジェクトが始まったきっかけは、1997年、サンフランシスコ出身の起業家マイク・コーチンスキーが、休暇でケニアを訪れ、そこで銃とフェンスで守られた、プライベートなサファリ地域から住民が排除され、野生動物の密猟や木を伐採して木炭を製造して収入を得るしかない状態に置かれているのに疑問を持ち、地域社会住民の生計維持と、野生生物保全を同時に可能にするプロジェクトを模索したことに始まる。

彼は、ケニア南東部ツァボ国立公園の東西を結ぶ野生動物の移動地に土地を借り、野生動物の保護区とし、そこでオーガニックコットンを使用したフェアトレードの衣料品づくりを始め⁽⁵⁾、現地コミュニティの雇用創出、社会開発、野生動物保護レンジャーの育成に取り組み始めた。

2009年からは、森林保護と植林によってCO₂の吸収分のクレジットを得るREDD+の枠組みを利用した基金でさらに拡大し、2011年からは、コンゴ民主共和国のボノボや象の保全プロジェクトも開始した。

REDD+⁽⁶⁾とは、正式名称がReducing emissions from deforestation and forest degradation and the role of conservation, sustainable management of forests and enhancement of forest carbon stocks in developing countries (途上国における森林減少・森

林劣化に由来する排出の抑制、並びに森林保全、持続可能な森林経営、森林炭素蓄積の増強)と呼ばれるグローバルな気候変動対策スキームの一つで、途上国における森林減少・劣化の抑制や持続可能な森林経営などによって温室効果ガス排出量を削減あるいは吸収量を増大させる努力にインセンティブを与える気候変動対策である。森林減少・劣化が予想される途上国においてREDD+を実施し、排出削減・吸収増大を達成すれば、その成果(排出削減量・吸収増大量)はREDD+実施者分の貢献として評価される。(図2参照)

国際社会において、REDD+の検討は、国連気候変動枠組み条約(UNFCCC)における2005年のパプアニューギニアとコスタリカの共同提案をきっかけに始まり、2007年には将来の気候変動対策として位置づけられた。具体的なルール作りにおいて議論は難航したもの、2011年の第16回締約国会議(COP16)において枠組みの方向性が決まりさらに、2013年の第19回締約国会議(COP19)において基本的な枠組みが決定に至った。

これら国家間の交渉と並行して世界各地でREDD+の自主的な取り組みが行われている。それらの一つがVerified Carbon Standard (VCS)で、気候変動対策活動から得られる排出削減量・吸収量

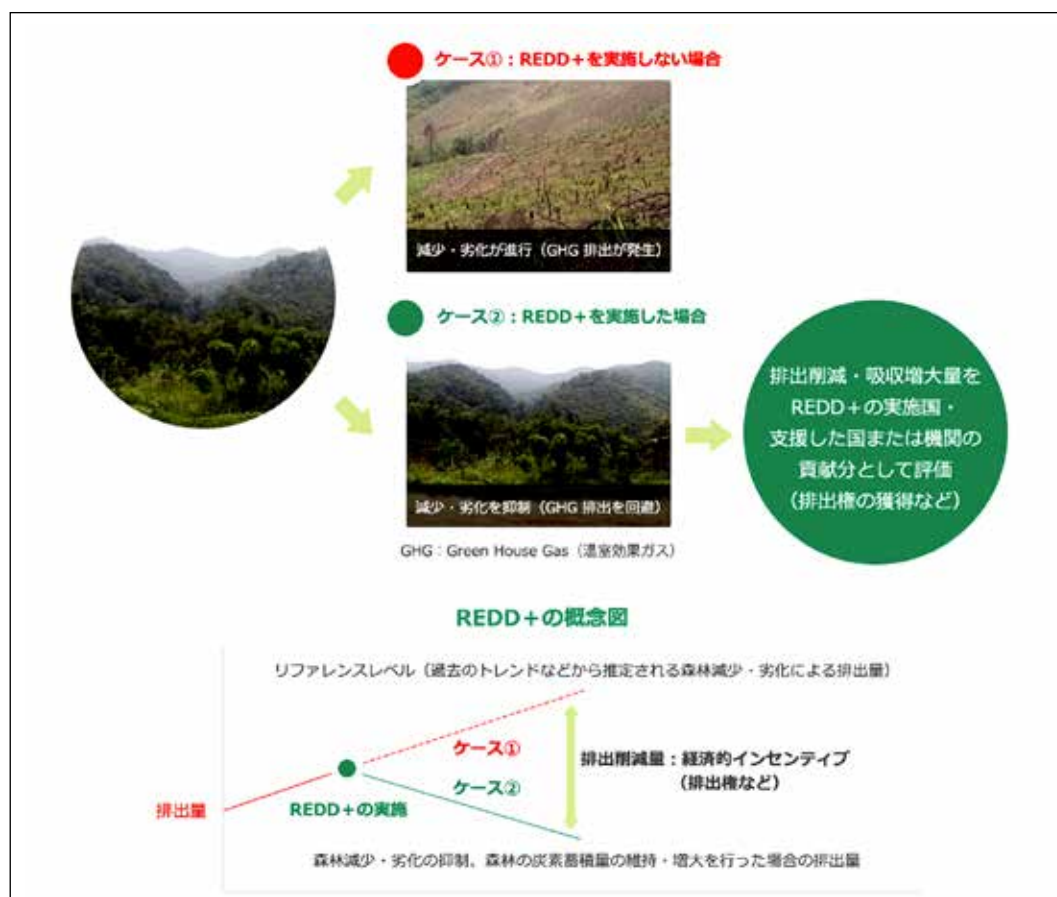


図2 REDD+の概念図
(出典 REDD+フォーラム <http://www.reddplus-platform.jp/about>)

を認証し、クレジットとして発行させる認証スキームである。

そして、世界で初めてVCS認証を受けたのがケニアにおけるこのWILDLIFE WORKSによる、“The Kasigau Corridor REDD Project” である。

このプロジェクトの拡大により、住民の間に大きな変化が生まれた。2010年、REDD+が始まる前には、WILDLIFE WORKSのスタッフは65人だったが、2017年には、300人を超えた。かつての密猟者が、安定した生計を求めてレンジャーとなり密猟を取り締まる立場になり、あるいは、学資が得られずに高等教育の機会を奪われていた若者がプロジェクトによる奨学金を得て、大学で環境学を専攻し、このプロジェクトのスタッフとして加わるようになったといった例もある。⁽⁷⁾

WILDLIFE WORKSは、フェアトレードと地域社会による野生動物保護を、REDD+という気候変動対策のグローバルなスキームを利用することによって可能にした。⁽⁸⁾

WILDLIFE WORKSのような、フェアトレードと地域社会開発、野生生物保全、そしてグローバルな気候変動枠組みを一体化した、フェアトレードプロジェクトは、フェアトレードと野生生物保全の優れたモデルとして、注目すべきであろう。⁽⁹⁾

また、このプロジェクトを、国際関係論におけるレジーム論から見ると、フェアトレードが関わる貿易レジーム、野生生物保護レジーム、気候変動対策レジームのすべてに関わっていることが分かる。貿易の公正化、野生生物の保全、CO₂の排出削減という目的は、それぞれのレジームで孤立したものではなく、現場においては、それぞれが複合し、言ってみれば、いくつかのレジームが重複して大きな相乗効果を発揮しているといえることができる。

4. 野生動物保全を目的とした認証制度

さて、フェアトレードの世界には、認証制度があり、これがフェアトレードを拡大していく上で大きな力になったが、野生生物の保全を目的とした認証制度もある。植物に関するものとしてFair Wild、動物に関するものとしてWILDLIFE Friendlyがある。ここでは、WILDLIFE Friendlyを紹介する。

動物に関わる認証制度がWILDLIFE Friendlyである。2007年に、責任ある生産を通じて野生動物保全を行うことを目的として、ワイルドライフ・フレ

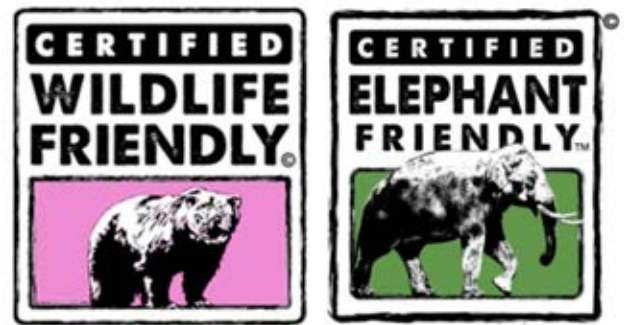


図3 Wildlife Friendly の認証ラベル例

ンドリー・エンタープライズ・ネットワーク(WHEN)が設立され、この認証制度がスタートした。

WFENは、脅かされている野生生物の保護また農村地域の経済の活性化に貢献し、また、人と自然の共存を保証する企業に認証を与えることによって野生地や農耕地の野生生物の保護につなげることを使命としている。

WFENの基準⁽¹⁰⁾の中には、

- ①売り上げの一部の寄付のような間接的方法ではなく、生産活動が、直接的に野生生物保護に貢献していること。
- ②生産活動は、野生生物と共生する地域社会が保全活動を取り入れ、認証された製品が、地域住民の生活向上に役立つこと。

等が、規定されている。

認証された企業の例としては、インド北東部アッサム州のボドサ茶園が有機栽培により高品質の紅茶を生産し、茶園の中に、象の移動を可能にする回廊を設けて、人と象の対立を解消した例がある⁽¹¹⁾。

この認証ラベルは、そこで保護される動物がラベルの中に書き込まれていて、非常に分かりやすく、また人目を惹く。(図3参照)

第3章で紹介した、アフリカ、ケニアのWILDLIFE WORKSは、このWildlife FriendlyとFairtrade Internationalのダブル認証を取得している。

おわりに

フェアトレードの可能性と題して、フェアトレードと野生生物保全の関わりを論じてきた。フェアトレードが主に発展途上国の貧困解決に役立つという一般の理解については、フェアトレードはその基準の中に、環境の持続可能性への配慮が原則として埋め込まれており、フェアトレードは、人に優しいだけでなく、野生生物保全を可能にする環境保全への親和性がある点に注目したい。

また、実際に行われているフェアトレードプロジェクトを見ても、野生動物原料に「代替」するを提供することによって間接的に野生生物保全に貢献し、フェアトレードによる収益の一部を野生生物保護団体に「寄付」することによって野生生物保全に協力する例がある。

密猟や樹木の伐採によって、人と動物の対立が起こっている地域社会においても、ケニアのWILDLIFE WORKSのようにフェアトレードによって地域社会に雇用を創出し、さらに、グローバルな気候変動対策スキームを利用することによって、総体としての自然環境の保護に大きな貢献をした例がある。

また、フェアトレードにおいて、運動の拡大に大きな役割を果たした認証制度は、野生生物の保護にも取り入れられ、地域社会の発展と野生動物の保護を保証するWildlife Friendly という認証制度も発展しつつある。

フェアトレードと野生生物保全という一見すると別の領域のテーマに思われる課題も、良く考えると深いかかわりがあることがこれらの例から分かる。

中国の古典『莊子』の中に「混沌」に触れたエピソードがある、「混沌」は目も鼻も耳も無い。哀れに思った人間が、目、鼻、耳を作ったところ、「混沌」は、死んでしまったという。不公正貿易の解消、野生生物の保護、グローバルな気候変動対策というのも現在の地球社会が抱える喫緊の課題に対処するために人間が作った、目、耳、鼻なのかもしれない。混沌とした現在の地球社会の問題を包括的に捉え、対処するためには、混沌そのものから解決のためのエネルギーを引き出す視点が不可欠だろう。

(以上の小論は、2019年3月刊行予定の『北星論集(経済学部)』に掲載される予定の「フェアトレードと野生生物保全～フェアトレードタウン札幌への覚書」を抜粋、改変したものである。)

1. フェアトレードの例として挙げられているわけではないが、JWCSのHP <https://www.jwcs.org/themes/sdg12/>でも「持続可能な生産と消費」のテーマで、「動物を守るとしている食品」として、コーヒー、紅茶、カカオ、コメ等のいくつかの具体例が紹介されている。
2. タグアとは、中南米地区に自生する「象牙椰子」とも呼ばれる植物の種子でベジタブル・アイボリーとも呼ばれ象牙に代わるエコ素材として注目されている。タグアは種から発芽するまで3年を要し、その後発芽し実になるまでは10年以上かかる。完熟する前の種はゼラチン状で水分を含み、動物や鳥たちのジャングルでの栄養源となる。役目を終えたと、完熟期に入り実は自然に地面に落ちゼリー状だったその種子は、乾燥し非常に硬く変化していく。加工は、木を痛めることなく、地上に落ちた種子だけを使う。 <http://www.lataguajapan.tokyo/about>
3. タグアの利用は、19世紀からプラスチック製品が台頭する20世紀半ばまで衣料品のボタンとしての利用が一般的であったことを考えると、タグアの利用を普及することにより、今日の環境汚染の元凶となっているプラスチック製品を代替するものとしても期待される。
4. ジェーン・グドールは1934年ロンドンに生まれた世界的類人猿研究者。1960年タンザニアでチンパンジーの定着調査を開始し、道具の使用、雑食など数々の画期的な発見で世界に衝撃を与える。1977年、「野生動物の研究と保全」、「動物の福祉」、「環境教育と人道教育」を行うための組織としてジェーン・グドール・インスティテュートを創設した。現在ではジェーン・グドール・インスティテュートは、世界19ヶ国に拠点をかまえ、幅広く活動を展開している。ジェーン・グドール・インスティテュート・ジャパンのHPは、<http://www.jgi-japan.info/>
5. Changing Kenya's Landscape for Wildlife and Jobseekers” by Amy Yee , June 8,2016 THE NEW YORK TIMES
6. 以下、REDD+に関する解説は、「森を世界から変えるREDD+プラットフォーム」
<http://www.reddplus-platform.jp/about/>に拠っている。
7. “In Kenya, a Transformation in Shade of REDD” by Amy Yee , July 28,2017 UNDARK (UNDARKは、マサチューセッツ工科大学のKnight Science Journalism Fellowship program により発行されている、非営利のウェブマガジン。
8. これまでにも、フェアトレードプロジェクトに政府開発援助(ODA)の技術援助が協働して成果を取めた例は、いくつかあるが、このWILDLIFE WORKSの場合には、グローバルなレベルでの、しかも気候変動という、一見すると分野を異にするスキームを利用することにより、成果を拡大した点に大きな特徴がある。
9. WILDLIFE WORKS は、プロジェクトを紹介する動画をYoutubeにも、アップロードしており、「WILDLIFE WORKS」で検索するといくつかの動画を見ることができる。<https://www.youtube.com/watch?v=jc9MWLkLTP0> は、REDD+ が導入される前にCNNで紹介されたニュースストーリー。REDD+が導入された後のプロジェクトの発展は<https://www.youtube.com/watch?v=9gdbuH3kTKo> で見ることができる。(2019年2月14日参照)
10. Wildlife Friendly のHP <http://wildlifefriendly.org/criteria/> (2018年9月4日参照)
11. “A jumbo cup of Assam tea” THE HINDU, 21 October,2017.